

T君への返事

三好十郎

1

T君――

君の長い手紙をもらいました。どうもありがとうございます。

君が現在ぶつかっているいろいろの問題がよくわかりました。それらの問題の全体も一つ一つが君だけの問題ではない。君と同じような問題で苦しんでいる人びとが、ぼくの知っているだけで二、三十人いるし、それ以外にも全国に同様な青年たちがひじょうに多いということも、雑誌、新聞などでよく知っています。同時に、これらはぼく自身の問題でもありますから、とにかく一生けんめいに考えてみます。ただ私のくせで、言葉づかいが乱暴になつたり、君の意見をまつころからやつつけてみたりするようなことがあるかもしれないので、どうか腹をたてないでください。

私は君の手紙1、2、3のチャプターの順序をおつて答えようと思うのですが、そのまえに、もつと重大なことがあるので、まずそれをのべます。それは、それによつて君の手紙全体が

色づけられている気分的、感情的なもの——という人間にとつて、個々の問題についての意見よりももつと根源的に重要なもののことについてです。

それは三つばかりあります。第一には君がおちいつている悪い意味でのセンチメンタリズムです。第二は、君の内部に、どういうものかひじょうに根ぶかく巣くつているエリート意識です。それと、そのすぐ裏側にある劣等意識とのことです。第三は、君の人生観・生命観のことです。

第二に君が悪い意味でセンチメンタリズムであるということ。君は、あの手紙の最初の部分で、ぼくの病気を心配してくれて、書いていてくれる。それはありがたいと思うが、その中で君は、「どうか生きぬいてください」と書いています。君が以前にもこのようなことを何度か書いてよこしたのを記憶しているが、ばかなことを言うものではないと、いう気がします。ぼくは、生きていくことに喜びを感じている人間で、今後も生きていこうと思つています。それは当然なことです。それだからこそ、こんなふうにいるいろいろなことを考えたり努力もしたりする。

人間が生きるということは、甘い杯を飲みほすと同時に、苦い杯も飲みほさなければならぬということです。人生にはさまざまな喜ばしいことがあると同時に、苦しいこともある。そして「死」というものも絶対的なものとしてわれわれの前途にあるのです。人間は皆そのうちに死にます。こんな厳粛な、しかもわかりきつたことを、かるがるしく口にするのは、愚かな浅薄なことです。そのように愚かしい浅薄さから、堅固な考えかたは、生まれてはこないと思います。またもうひとつの例をあげます。

私のかつて発表した文章から、君は、いくつかの引用をしているが、「私は今後戦争が起きそうになったら、また起きてしまつてからも、それに反対します。(略)そのために、かりに何か

の圧力が私のうえにくわえられることがあつても、その圧力がひどくなつて、私をして沈黙せざるをえなくさせるまで、つづけたいたいと思います。」と、「——紙芝居屋になる。(略)さて、そういうこともやつておれなくなつたら、しかたがない、乞食になる。そして時間とエネルギーの余裕だけを戯曲を書くことに使う。」の引用のしかたが、まったくセンチメンタルである。

つまり、「先生が戯曲を書くということは、いわば、先生の生命のようなもので……」と、君は書いている。このように、「生命」という言葉を使う君は、近ごろの流行歌の中に出てくる、「なんとかいのち……」などと同じもののように考えているのであろう。しかし私は、乞食になつてからでも戯曲は書きます。それを私は冷たく決心して、それを何の誇張もなく言つていけるのです。私はこのようなことを考えて、センチメンタルに悲壮な気持になつて「歌つて」いるのではないのです。

君のようなセンチメンリズムは、私は好みとしてもすかないし、また客観的にもまちがつたものです。われわれが、しつかりものを見、考えていれば、そのような浪花節的センチメンリズムは生まれてはこないのです。

「死」のことをかるがるしく語る大敵は、真の意味で生きることできない。

もちろん、君がこんなセンチメンリズムにおちいらなければならなかつたという原因や理由は、ぼくにもわかるような気がするし、それらの困難さや、圧迫を受けてきた君には、同感し、同情するが、しかし、じつは、そうであればあるほど、そんな、よわよわしくセンチメンタルであつてはならないはずです。ぼくは、君のセンチメンタルに、二重に腹をたてています。

第二に、エリート意識と、その裏側にある劣等意識です。それは、二枚の紙の表裏のような関

係にあります。そして、このいずれのものも、私にはミジメにコツケイに見えます。

このことは、君の手紙の随処に出てくる。とくに第二のチャプターで書いてあることがらに、ひじょうに強くでている。

君の村に、建設大臣代理が来ることになり、村会がはからつて君の学校の生徒たちが、旗をつくり、それをふつたり、給仕に出たりすることが決められたという。このことにたいして君は、即座に、反対しなければならぬと感じた。それを君はしなかつた。そして、生徒たちは旗を振つたり給仕をした。その責任が、全部自分にあるように君は感じたらしいが、それはおかしい。それが君のエリート意識です。

君の生徒たちは、ほかでも気持ちがいでもありません。君の、生徒たちにたいする日常における教育がしつかりしていたならば、ものの考えかたについて、それほど根本をあやまることはないだろうし、大臣代理の歓迎問題についても、ことの是非を正しく判断しえたらう。實際上旗をふつたり給仕に出たりしたことは、その判断とはいちおう別の理由からであつたにちがいない。だのに君はまず生徒にまるで判断力がないかのように思つていようだが、これは、エリート意識です。この意識は、ざんげ病にも通ずる。

世の中の悪いことは、全部自分に責任がある——というものの考えかた。宗教的天才によくあることです。これらの人びとは、ざんげする。ばあいによつて世のすべての人びとの罪を一身に背負つて十字架にかかる。そうしなければならぬ必然性がその人のうちにあることだから、他からは是非は言えない。美しいことだと言うこともできるだろう。もし君が、真に生徒を思い、生徒全体のいつさいのことは皆自分に責任があると思うのなら、なぜ、弾圧——つまり君にとつて

の十字架を背負わないのです？ また、十字架にかかる覚悟がないのなら、なぜそのようにザンゲしたり、自分をいじめるのです？ いやいや、私はそのように敏感な君の良心を美しいとは思うのです。しかし同時に、その美しさは病気になつた美しさだと思えます。エリート意識と私が名づけるのは、そのことです。そして、そのエリート意識の裏は劣等意識なのです。

君は、自分に全責任がある——と書きながら、その同じくだりの中で、「——苦しみの矢面に立たなかつたばかりでなく、校長と生徒とを二重三重にあざむいたのです。給仕にいつた女生徒は、純な魂を、相当いためてもどつてきました。いま、これを書きながらも、胸がキリキリいたみます。」といい、それから、「こんなデタラメな、ごまかしの、てんでなつていない理屈をならべたてて、自分の身をかばいました。」ともいつている。

また、第一のチャプターで、「——いまはわからないままに、また、もとへもどつて、私の、弱虫な、美しくない、卑怯な考えを書かせていただきます。『クビにする』と言われれば、まいつてしまうような、ウジ虫みたいな私が——」とも君は書いている。

自分のことを、ウジ虫と言つている気持はぼくにもわかる。ときおり、自分をひじょうに下等に感ずるばあいがわれわれにある。が、しかし、君は、そう感じていながら、なぜ、このように良心的に責任を感ずるのだろうか？ ウジ虫なら責任もなにもないではないか！ ウジ虫が、なぜ、責任を感ずる必要があるのか？ つまり、エリート意識が君を支配した。というより、エリート意識と劣等意識のあいだを、君は行つたり来たりしているだけなのです。君は、すべてのことにたいして、「おれが——おれが——と思ひ、同時に、「おれなんぞ、おれなんぞ——」と思つているのだ。

### 第三に君の生命観について。

君の生命観はひじように片よつている。その片よりからくるリゴリズム（厳酷主義）これが、君を病的に倫理的にしているらしい。

人間がその内部に宗教的要素をたぶんに持つてゐるばあい、たいてい、その人間は、ひじようにモーラリスティックになるようです。

たとえば、トルストイなど、そのいい例でしょう。トルストイという人は、ひじように偉大な人間でした。彼はじつに鋭い良心をもつていたが、それがしばしば宗教的のところまで高まつて、彼をして異様なくらいに、厳酷なモラリストにした。そして、それが往々に、彼の人間性と相克して、彼をひじように苦しめたのです。

その彼の良心の鋭さには、われわれは敬意をはらわざるをえない。しかし、そのことから彼がした行きすぎた考えや行為から、彼自身のうえにも、周囲の人びとのうえにも、なんにもよいことが引きおこされてはいない。彼の厳酷主義は、ただ苦しみと矛盾を引きおこしただけなのです。

一例として、彼の菜食主義をとります。彼は、「生きものが、生きものを殺してはならない」という考えかたから、ある時期に菜食主義を厳守した。つまり、動物でなく植物ならよかろうと考へたらしい。

しかし、よく考へてみると、植物だつて生きものである。生きてゐるといふ点で動物となんら変りない。そこで、それら植物の生命にとつて不要になつたと思われる葉——つまり、枯葉や、落ちた木の実を食べて生きればよかろうということになる。が、ここで、またぶつつかるものがある。なぜなら、木の実は、そのまま地面に落ちていれば、やがて発芽し、育つていく。つまり

草木の実は、それらの草木のタテの生命をつなぐという任務がある。それもまた生命である。だから、草木の實を食つて人間が生きることにも罪悪である。すると、他の生きものの生命を殺して食わないで、人間が生きていくためには、人間はどうすればよいか？ トルストイは、そのことを素朴に真剣に考え悩んだらしい。その真剣さにわれわれは敬意をはらわないわけにはいかないが、人間というものを全体としてながめて肯定する立場からいえば、彼のリゴリズムは病的といわざるをえない。同じことは彼の社会問題についての考えかたについてもいえると思います。

君のことを語るのにトルストイを引きあいに出すのは、あたらないかもしれません。しかし君の過敏な良心が君を病的にリゴリスティックなモラリズムにまでみちびいている点では似ていると思うのです。

人間は、倫理や社会思想だけで生きていくのではない。倫理や社会思想をもつまえから生きていくし、また、そのようなものよりも広い、そして深いものうえに足をおいたところから生まれてきたものだし、生きていくものです。倫理や思想は大事なのですが、しかしそれよりも根本的にさらに大事なものがあります。それを見ちがえたり、さかだちさせたりしない方がよいと思います。

以上だいたい、君の手紙のあらわしている基調の二三について語りました。つぎに1、2、3のチャプターを追つてのべることにします。

君は、私がしばらくまえに中央公論に書いた「石がもの言う時」という文章を読んでくださったろうか。あの文章はF県に住んでいる、君よりはいくらか年うえではないかと思う、やつぱり中学の先生をしてる人に書いた返事です。

あの中で私がとりあげていくつかの問題と、君が私に質問しているいくつかの問題と、同じものがかなりあります。中でたとえば生活綴方にたいする弾圧などのことはそっくり同じです。君の身のうえに起きていることは、その人の身のうえにもそっくり起きているのです。同じことは、もつとひじょうにたくさんの方の教師たちの身のうえにも起きているらしい。

とにかく、君が君の手紙の第一と第二の中で書いていられることには、「石がもの言う時」が、私の返事だと思つてくださつてよい。それから君は、私が二三年まえに書いた「抵抗のよりどころ」および「抵抗の姿勢」それに「ジャーナリストへの手紙」を読んでくださつたらしいが、こんどの君の手紙によつて私が推察するのに、それらの私の文章の読みかたがかなりまちがつているようです。

それは、私の書きかたがまずかつたためかも知らないが、もしかすると、君の読みかたの我田引水流の片よりのためかも知らないと思います。すみませんが、あれらの文章をもういちど読みなおしてみてください。そのうえで以下のべる、この私の手紙を読んでください。そうすれば、もつとよく私の考えがわかつてもらえると思います。

さて、そこで、君の手紙の第一と第二に書かれてあることについては、「石がもの言う時」で私はだいたい答ええていると思ひますが、しかしなお不十分だと思はれることを、君の手紙に添



いながらおぎなつてみましょう。

前記の「抵抗のよりどころ」以下三つ四つの文章、つまり、いわば私の抵抗論をつぎのように要約することができます。

「私はなるべく抵抗などしたくない。そのために、私が抵抗などしないでもよいように、一般の政治がなるべく悪い政治にならぬように、ふだんから一市民として努力する。

それは、選挙のばあいにはできるだけ反動的な候補者に票を投じないとか、また、一般の政治について、自分の意見をそのときどきに正直に発表するとか、その他の方法である程度までできることだと思ふ。しかし、どうしても自分が抵抗をしなければならぬような事態がやつてきたら、よい加減のへつぴり腰でなく、徹底的に抵抗したい。それにはなるべく、自分のつねの姿、自然な姿でそれをした。または、自分たちを圧迫してくる力をなるべく早く、私のつねの姿の中に組みこんでしまつてそれをした。それは、自分のやりようしだいである程度までできると思ふ。」

これと矛盾するようなことを、私は、私の抵抗論の中で何ひとつ言つていません。もし、矛盾するようと思ふことがあつたら、それは文章の字面のうえでそう見えるだけで、本質的な矛盾ではありません。

たとえば、君が引用している「情報局からおどかされてもへこたれなかつた者も、軍部からおどかされたらひとたまりもなくまいつた例がある。それくらいなら、はじめから情報局にも抵抗しない方がよかつたのではないか？」という意味の私の文章は、つぎのような意味です。

戦争ちゆうに、情報局が全国民の思想統制機関として、力をふるいえたのは、情報局自体に力があつたためではなく、その背後にある国家権力、そして、その集中的機関としての軍部や警

察力に力があつたからです。そのことをわれわれ国民のだれもが知っていた。知っていたからこそ、情報局はある程度まで国民にたいして統制力をふるうことができたのです。

だから、情報局の役人にたいして抵抗するということは、結局はその背後の警察や軍部にたいして抵抗するという準備や覚悟なしには、ホントの抵抗にはなりえなかつた。当時の情報局の下ツ端役人にたいして、ただ、言葉のうえだけで、しかもホンの一時的に反抗してみるということは、真の抵抗とは縁どおいことであつたという意味です。

つまり、私の言おうとしていることは、自分がそれにむかつて抵抗しようと思うならば、その抵抗すべき敵の実力の出どころの根元をはつきりと認識して、それと正面衝突したばあいに起る最悪の事態についての認識と覚悟をもたないで、ただ単にその手まえのところ、言葉のうえや、形のうえや、または一時的に抵抗するらしい姿勢をとつてみても、それはホントの意味を持ちえないだろうということです。

つぎに、君の手紙の1と2を読んで私が感じることは、君の敏感さと経験不足のために、君が抵抗しなければならぬものをあまりに多く、またあまりに強く感じすぎているのではないかという疑問です。

私の友だちで以前左翼の運動をやつていて、現在でも左翼的な考えを持つた人がいますが、その中に、外を歩いていて、むこうから警官がやってくるのを見た瞬間に、本能的に、自分を取りしらべたり、つかまえにやつてくるのではないかという感じがして、いつとき心臓の鼓動が早くなるといふ人がいます。

その人たちがそうなるのは、以前に警官や特高の刑事から、不当に弾圧された経験があるから

のためで、そうなるのも心理的にはわかりませんが、しかし、やはりそれは思いすぎです。いや、人のことにはかぎらない、私自身にもそのようなことはあつたし、現にいまでも多少あります。

戦争まえから戦争中へかけて、私のようなところへも、特高の刑事や、ばあいによつて、憲兵などがやつてくることがときどきあつたが、そういうときに、たとえば、特高がやつてきたと聞かされただけで、その場から警察へ拘引されはしないか、その他最悪のことを考えてドキンとすることがよくありました。

さて、その刑事に会つてみて、いろいろきかれたりして不愉快な思いをしたこともありますが、ときによつては、それが、私が以前一二度会つたことのある、ある人間の最近の消息を知らないかという調査のために来ただけであつたのだということなどもありました。そして、その刑事が帰つたあとの自分の気持ちをしらべてみると、特高警察というものから、ひじょうにいじめられ、弾圧されたような感じがしたことがあるのです。もちろん、特高警察や、憲兵隊の存在そのものがよくないものであつたことにはちがいないが、しかし、さしあたりの刑事の訪問は、別に、私を直接弾圧するためのものではなかつた。それをそう感じたのは、私の過敏さやかんぐりのためだつたのです。君のばあいにもそういうことが多少はあるのではないでしようか？

君の友人の教師たちが役人の訪問を受けて、いろいろのことをきかれたというが、直接生活綴方運動または、それをしてしている教師たちをマークするためだつたのか、それともほかになにかの理由や必要あつてしたことなのか、君の手紙だけでは分かりませんが、たとえば君の県の教師で、生活綴方運動に熱心な人がいて、その人がたとえば秘密共産党員であるということが分かつたとか、またはその仲間の人たちのあいだに非合法な行為をした人があつて、その事件の参考として、

生活綴方運動の仲間の教師たちを、役人がしらべて歩いたということもありうることだと思っております。

もちろん、それにしても、そのような役人の訪問を受けること自体不愉快なことだし、かつまた、日本の市民は、法律によらないばあいは、役人の訊問を受けることを断つてよいという人権にまもられているのですから、それ自体としてまちがったことであるにちがいません。しかし、たかがそれくらいのことです、そんなにおびえてしまうのは、なさけないことですし、それにまた、それくらいのことです、それほどおびえる人が多いということを知れば、君もごぞんじのとおり、現在の政府は反動的なことをつぎつぎと推進しようとしている政府ですから、そのことを利用して、国民全体を黙らせることができるかと当局をして思わせるわけで、つまり、いまの政府の反動政策をわれわれの臆病さが助けるといふ結果になります。

道を歩きながら、溝みぞに落ちまい落ちまいと、そのことばかりを気にしてる人は、ある意味で、もつともたやすく溝に落ちる人です。過度の被害妄想を持つている人ほど、もつともたやすく当の加害者の犠牲になりうる人はないとも言えるのです。もちろん、身も心も弱い、そしてマジメな、そしてやさしい気持を持った君が、そのようなことから被害妄想じみてくることは、私によく理解できます。

私自身もある意味で、たえず被害妄想にとりつかれている弱虫の一人なのです。それだけに君にもつと強くずぶとくなつてほしいと思います。なぜなら残念なことに、当分のあいだ、日本の状態はこれ以上暗くなることはあつても、明るくなるという見とおしを私は持てないからです。おたがいこのさい、しつかりと腹をすえようではありませんか。でないといわれわれ自身、これ

以上不幸になると同時に、そのことによつて、日本全体の暗さを、さらにひどくすることになるでしょうから。

つぎに君は、「仲間といつしよに、声をそろえたり、または、新聞に投書をしたりして、警察の生活綴方弾圧に反対するのはまちがいか。」と言つていられるが、それはもちろん、まちがいはなく当然のことです。もつとも、君の手紙に書かれてあるかぎりでは、「警察の生活綴方にたいする弾圧」とは言いにくいようだし、このばあいは私が言つた、憲法によつて保障されている基本的人権のひとつ、すなわち「日本国民は法律によることなくして警察官その他から訊問されたり、搜索されたりすることはない」という条項を当局の役人が破つたということについて反対するのが至当だと思います。

そのような反対の意見を法律によつて許された場面で公表するのは、われわれ国民の権利であるとともに義務です。犬の遠吠えも近吠えもありはしない。ただ「そうすれば、相当の効果があらはれないか。」と君は言つているが、私はそれほど効果はないと思う。その点でも私は君よりも悲観的なようです。ただ効果がどんなにわずかでも、またさしあたりは全然効果がないとしても、言わないよりは言つた方がマシだと思う。ただ、このばあいも「石がもの言う時」の中で私が書いたように、そのような意見を、軽率な形で公表したことが動機になつて、さらに悪い状態が君の上におおいかぶさつてくることにはつきりしているばあい、かつ、そのために、君以外の多数の同僚の教師たちや、生活綴方運動全体に迷惑がかかることが予想されるばあいには、よほど慎重に考えたうえでそれをした方がいいでしょうし、ばあいによつて、反対意見を公表しないでおくということもありうる点は、「石がもの言う時」の中で書いたとおりです。

T君――

私が君の手紙の1と2とを読んで、つぎに感じたことは、「教育」ことに「義務教育」についての君の考えかたが、行きすぎたり片よつたりしているのではないかということでした。

君は中学校の先生ですから、いわばまあ教育の専門家であつて、私は一作家で、教育に関してはシロウトです。その専門家のことを、シロウトの私がこんなふうに言うのは乱暴かもしれませんが、しかしばあいによつて、専門家が気がつかぬことをシロウトが気がつくこともありうるのですから、まあ聞いてください。

教育家が誠実な教育家であればあるほど、教育の仕事についての理想を持っているのは当然だと思います。そして彼らはその理想に近づくために努力します。それはよいことです。ところが、そのように誠実な人の特色でしょうか、または理想というものが本来そういう特性を持っているものでしょうか、そういうばあいに往々にして起きることは、教育される側の其の自然な正常な要求を見すごしてしまつて、「教師ヒステリー」とでもいうべき状態におちいつてしまうことです。そして私の見るところでは、君もそのヒステリーにくらかおちいつていられる。

教育される側の真の自然な正常な要求と私が言うのは、将来一人まえのバランスのとれた成人として生活していくために必要な、そして生徒のその年ごろにふさわしいところの基礎的な知識と教養のことです。

熱心で誠実な教師たちの中にとときどき、それらを見おとしてしまったり無視したりして、その教師自身の主観的な欲求や意図を中心にしてイキリたつ人がいます。生徒たちは、しかしそんなことはあまり考えない。その先生が熱心で誠実であればあるほど、彼らは先生を敬愛して先生の欲求や意図に忠実に答えようとする。その結果、不自然な不具な生徒がつくりあげられてしまうことがあるのです。

私の知人の一人に、中年すぎのひじょうに尖鋭な共産主義文学者がいますが、いつかその人が自分の一人子の中学生の学校教育についてこぼしているのを聞いたことがあります。

「うちの子が行っているのは、公立の中学校なんだが、そこに左翼的な教師がたくさんいるんだ。それはよいが、それらが各種の学科の時間に、よく学科を教えることはいいかげんしておいて、何かというと社会主義や共産主義の方へ話を持つていつて、そういうことを吹きこむ。

相手は子どもなんだから、そんなことはまだ早すぎるし、そんなことよりも日本語を正しく話したり読んだり書いたり、算数を正確にやれるようにしたり、たとえば、社会科にしたつてインフレというものの左翼的な解釈よりも、インフレというものはどんなふうにして起るものかというのを教えてくれればよいのだが、それをしてくれない。じつに弱る。

だから近ごろでは、共産主義者の僕が家庭で基礎教育をしてやつて、共産主義者でもなんでもない教員が、学校で共産主義を吹つこんでいるよ。ところが子どもは父親よりも先生の方を尊敬しているから、先生の言うことの方をよくきくんだ。困るよ。」と言うのです。

彼の考えによれば、小・中学校の教育は、子どもたちが大人になつてから一人の人間として立つていくための基礎的な知情意の訓育でなければならぬというのです。

先ず何よりも、読み書き算数や歴史や物理や化学や社会にたいする見かたの基本的なものと、人間として正常で素直で親切な情操を植えつけてほしい。それさえあれば、後は子どもがしだいに成人になつていきながら、自分の力で観察したり考えたり判断したりして、もし左翼的な考えを正しいと思つたら、そのような人間になるであらうし、そうでなければそうでない人間になるだろう。いずれになるにしてもチビも自身に自由に選択させてやりたい。……そう彼は思つていらっしゃるらしい。

私もまた、この人と同じように思います。私にも、いま十七になる娘が一人いますが、これまでそう思つて育ててきました。そしてそれでよいと思つています。

君はどう思いますか？

君の現在の教育者としての情熱や誠実さはりつぱだと思えます。それから生徒たちにたいする愛情も美しいと思います。それだけで君はすでにたいへんすぐれた教育者です。

しかし、君はたぶんまだ二十四歳か五歳の青年です。君の知らないことがこの世の中にはまだあるかもしれない。君の悟らない真理が世界にはまだあるかもしれない。君の正しいと思つていふことだけが正しいことの全部ではないかもしれない。いや、君が二十五歳の青年でなく六十歳になつた大知恵者であつたとしても、君の見たものだけが世界と人生のすべてではないかもしれないし、君の持つている真理だけが絶対的真理の全部ではないかもしれない。

その君が、人生と社会の現前のこまごまとした現象について、まだ幼い頭を持つた生徒たちに、君とまつたく同じように観察したり思想したり判断したりすることを要求したり、また、そんな要求が満たされないからといってイライラしたり悲観したり、はてはその全部について、罪は自



分にあるのだと思つたりすることはあやまりではないでしょう。それらは皆、教育者としての情熱と誠実さと生徒たちにたいする愛情ゆえの、一種のヒステリーではなからうかと私には思われるのです。

君が書いている建設大臣代理にたいして、生徒たちに歓迎の旗をふらせたり、食事の給仕させたりしたのは、たしかに村会や校長などのまちがいです。

それは村会や校長などのまちがいであつて君のまちがいではない。もちろん村会や校長のまちがいを君が怒つたり悲しんだりするのは当然でしょう。しかし、そのまちがいを即座にその場で根本的に正してやることは、君の任務でもなければ、君の力で可能なことでもない。なのに、どうして君は、そのことについてまでもイラだつて自分を責めるのか？

和歌山県に颱風のために風水害があつたとします。それは当局の役人たちや、いまの政治がもうすこし国民の幸福のことを考えていたら、災害はある程度までふせげていた。われわれがそれを怒つたり悲しんで、もつと政治や役人をよいものにしななければいけないと痛感するのは当然なことです。また、災害にあつて死傷したり土地や住家を奪われた人たちに心からの同情を感じずるといふのも当然のことです。

しかし、もしそれらの災害の全部が自分の責任であると思つたり、そのようによくはない政治や役人のいることの全部が自分だけの責任だと感じて、イラだち自責する人がいたら、少しおかしと思わざるをえないでしょう。

さらに、校長がそういうことを生徒たちにさせたことにおいて、校長はまちがつていたことは否定できないとして、しかし君に言わせると、「人情に厚い、もののわかつた」校長が、そのま

ちがいに気づかなかつただろうと君はどうして思ったのだろうか？ 君が気づくことに気づかないほどに校長がおろかであると、君はどんな理由で思ったのだろうか？

また、校長はそれに気づいてはいたのだが、もしそれを拒絶すると村会とのあいだにひじょうに大きな摩擦が起きるかもわからない、そうすれば村政のうえに波瀾が起き、ひいては村の学校教育の進行をさまたげるような結果が起きるかもわからぬ、すれば結局は教育の仕事にマイナスが起きる——というようなどころまで考えたり見ぬいたりしたうえで、そのようなより大きなまちがいを引きおこすよりも、生徒に旗をふらせ給仕に出すという小さなまちがいを承知のうえでやつて、そこで食いとめようと思つた。……校長はもしかするとそう思つたのかもしれないと君は想像したことはありませんか？

私は校長を弁護する気はありません。たぶん校長は「時代感覚からずれ」ているのでしよう。しかし、だからといつて、君が思つているほど、その校長がおろかであると思うことは、私にはできないし、その理由もないように思います。

われわれがヒステリーにおちいつているときには、われわれをヒステリーに追いこんだところの一つのことを中心にして、世の中のものごとのいつさいがつかいが、根本的にまちがつているという絶望的な気持ちにおそわれることがあります。君のばあいもいくらかそれに似た状態ではないかと思ひます。

君が感じられている生徒たちにたいする責任やザン愧きの心持の中にもそれがある。君が平常の教育の仕事の中で、生徒たちを公平に愛し、そして一同を正しく健全に教えみちびこうとしているのであつたら、君はたぶん、社会科や国語科などの時間に、この世の中で人びとがともに暮し

ていく中で、何が正しくて何が正しくないかについての基本的なものはずでに教えこまれていただろうと思う。それからまた、人間性の中で真に美しいもの真にたつとばれなければならないもの——つまりホントの意味で偉いということ、また、どのような人が偉いかについての基本的な規準は、君は生徒に与えられていることと思う。

それならば、歓迎の旗をつくっている生徒が「えらい人がくるから旗をふるんだ。」と言つても、その「えらい」という意味は、君が教えてある偉いということとは異なつた意味で使われているのだということは、君も当の生徒も諒解していると思つてもよいでしょう。またそれがそうであるならば、たかが手づくりの旗をふつて役人たちを歓迎するまねをするぐらいのことで、君の生徒たちが腐敗するなどと思わないでもよいでしょう。それに子どもたちは、もともと、ふつう、われわれが考えているよりも、明らかな目と、かしこい頭脳を持つているものです。

彼らの認識と判断とは、たかが旗をふつたぐらいのことで、根本的にくもらされたり、根本的に否定的な気持になつたり、そしてそれをおして君を根本的に信頼しなくなるだろうなどと、君はどうして思うことができるのですか？

君の受持ちの女生徒が役人の給仕に出たことについても同様です。それを君は、まるで女生徒たちが恐ろしい人間たちに人身御供にそなえられたように感じたらしいが、はたして、それが当をえた感じかたでしようか？

実際においては、女生徒たちは、たかだかこざつぱりした服装をさせられて、役人たちの泊つている旅館にいつて、学校で習つたお作法どおりに役人たちにお茶を出したり、お膳をささげ持つていつて、彼らの前にすえたりなどをやらされただけではないかと私は想像する。

いうまでもなく、そのような方法で役人たちの歡心を買おうと思つた村会はまちがつてゐるし悪趣味です。しかし同時に、それぐらいなことでも「その純真な魂をきずつけられて帰つてきた」と受けとる君の受けとりかたの中にある誇張は、ほとんど浪花節的な感傷主義のように私に見えます。

いくら幼くても十四五歳になつた魂が、それくらいのことでも根本的にきずつけられるほどゼイ弱なものではありません。事実また君がそれほどまでの愛情をかたむけて人間としての基本的な正しい生きかたを教えこみ育てあげつつある生徒たちが、それほどゼイ弱な魂を持つてゐると、どういふ理由で君は考えることができたであらうか？

君は病氣なのです。その病氣は、教育にたいする熱意と、人間としての誠実さと、そして感傷的な誇張癖がいつしよになつたところから起きたものです。

#### 4

丁君――

つぎに私がのべたいことは、生活綴方運動のおちいつてゐる弊害の一つについてです。

生活綴方運動全体についての行きとどいた知識を私は持つていません。しかし私が知つてゐる範囲内だけでも、それは全体として、日本の教育界によいことをたくさん生みだしています。

それはばあいによつて、現在の義務教育の中で、他のすべての学科に匹敵するくらいの大い功績をあげている。というよりも他の学科全体をそれによつて、いきいきとしたものにさせてい

るビタミンまたはホルモンのような効果をあげているとさえ言えます。それをわれわれは認めなければならぬ。と同時に一方において、じつに深い弊害をも生みだしていると私は思います。それは何かというと、現在生活綴方運動に熱心な教師たちの大半が「進歩的」教師のようです。いまの日本では妙なことに、そしてなさないことに「進歩的」ということは「左翼的」であることと同義語に近くなつていきます。それを私はまちがいだと思うが、しかしある考えかたによれば、ある程度までそのとおりだと認めてもよい理由がありますから、いまのばあい、いちおうそれはそうだとしておいてよろしい。

ところが、生活綴方運動に熱心な教師、「進歩的」すなわち左翼的な考えを持った教師たちの左翼思想というのが、思想として考えつめられ、検討しつくされて成りたつた思想とは言えないもので、ただ一種の左翼ファンふうの気分的な、または一面的な、または感傷的な傾向であるにすぎないと言つたほうがあつては多いのです。そして、そのような気分的な左翼傾向がかならずおちいるところの極左小児病的な要素をたぶんに含んでいるばあいが多い。

これが、考えつめられ検討しつくされたうえでの思想——思想と名づけうるような左翼思想——たとえば一つの体系としてシツカリとつかまれた共産主義をそれらの教師たちが持っているばあいは、まだよいと思う。なぜなら、そのような共産主義者ならば、小児病的な言葉や観念のうちだけでの感傷的な過激には走ることが少ないでしょうから。

しかし、実際においては、前述のような教師が多いことを私は知っています。あるいは君などもそのような教師の一人かもしれないと思うが、どうですか？

そして、そのような教師たちのつねとして、いまの日本の状態について、ひじょうに否定的な

気分と考えを持つています。もちろん現在の日本の状況の中には否定的なものがじつに多いから、ある程度までそうなるのも無理のないことであるが、しかし彼らの否定的な気分と考えとは、実際の否定的状況の反映としてのバランスをはるかに越えています。

それはちやうど、文学癖に取りつかれた少年がある時期におちいる「深刻病」に似ています。彼には自分を取りまく状況を実際以上に否定的な絶望的なものだと思ひこむのが、一種病的な快楽なのです。

そのような教師が生活綴方で熱心に生徒を指導します。そして生徒たちは、そのような先生を好くものだし、信頼します。たしかに、ただ生活の手段としてだけ教員商売をしている教師や、ふるくさい道義だけをふりまわして、真の教育については無関心な教員にくらべれば、右のような教師たちが生徒たちから好かれたり信頼されるのは当然なのです。そして小・中学時代の生徒にとつて学校の先生はある意味で絶対なのです。絶対の規準です。生徒たちは先生からほめられたい。是認されたい。気に入られたいのです。だから、綴方を書いても、知らずしらずのうちに、その先生に是認してもらえらるような主題や材料をえらび、その先生に気に入られるような書きかたをします。そして、いつのまにか、この生活と社会とを暗い否定的な面だけから眺めた綴方が生活綴方の主流になったのだと思います。

なるほど生活綴方は、生徒たち自身の自然発生的な独創性をのびし、生徒たち自身の自由な観察力や思考力を芽ばえさせ培つちかつていくもので、教師はただそれに道を開いてやることで指導していくべきものだと言われているようですが、実際は、はたしてそうやられているでしょうか？ 独創性だとか自由な観察力や思考力などの言葉は、りつぱな言葉です。それは尊重されなければ

ならないし、実際においても、たしかに幼少年のうちにそれが存在していることも否定できません。

しかし、だからといって、独創性というものが、じつはいかに密接に模倣性とながっているか、また、「自由な」観察力や思考力が、じつはいかに深く幼少年を指導する大人たちの暗示や誘導からみちびきだされたものであるかという実際の事情に、われわれは目をふさぐわけにはいきません。

実際、私がこれまでに読むことができた生活綴方の中のひじょうに多くの作品が、それを指導した教師の「誘導訊問」（妙な言葉ですが）にひつかかってできあがったものではないかとの感想を私は避けえられませんでした。

その証拠に、それらは、みなじつに暗く否定的な要素に満ちています。明るい、浮きうきした綴方がほとんど見あたりません。なのに、それらの生徒たちの実生活の中には、暗い否定的な要素があると同時に、明るい肯定的な要素も数多くあるのです。

ならば、どうして綴方にそれらをも反映した作品があらわれてこないのでしょうか？ たぶんそれは、そのようなことを書くと、指導者の先生たちの気に入られないのです。だから生徒たちはそれを書かないのです。……これは私の想像や推断だけではなく、私はある程度まで、そのような事実が相当にひろがっていることを知っています。

もし私のこのような見かたがあたつているとするならば、そのような教師たちは、自分たちの主観によつて、生徒たちを片よつた知性と感性の中に引きずりこむことによつて、生徒たちを不具にしてしまう危険をおかしていることになります。

つぎにそれらの教師たちは、思想的にも生徒たちを困った状態の中に引きずりこみつつあると思います。なぜなら、そのような教師たちが生活綴方を中心にして生徒たちに植えつけつつある思想は、粗雑な社会主義や共産主義的思想です。

生徒たちはすなおです。信頼している先生からつぎこまれるものは疑わないで呑みこみます。それで、生徒たちは、しだいにホントに社会主義思想や共産主義思想を自分のものにして、学校を卒業して成人になったときに、チャンとした社会主義者や共産主義者になりうれば、まだよいのです。そうなりうるように、それらの思想の正確な入門的な基礎を、先生がたが叩きこんでいてくれれば、まだよいのです。

しかしじつは、その先生たち自身がホントは思想的にアヤフヤな人が多いので、ただ入門的な箇所だけで生徒たちをそれらの思想へむかつてケシかけるだけというのが実情のようです。だから生徒たちの思想は、卒業その他の事情でその先生の手をはなれるや、現実との関係からひじょうな混乱におちいるのが多いようです。

つまり、たとえば、鉄管のこちらの口から水を流しこんでおけば、そのうちにむこうの口から水が出てくるのは当然ですが、それが出てこられては困るばあいがありうるならば、最初こちらの口から水を流しこむのに、もうすこし慎重であつてもよくはなからうかと私は考える。

それも、その水を流しこんだ先生自身が、社会主義者または共産主義者として、その実践との関係において筋のとつた生きかたをしており、また、ながい期間にわたつて一貫性を持った主義者であるならば、まだよいが、私の知っているかぎりでは、そういう人はあまりいません。すなわち、そのような教師たちは、自分たちの思想について、同時にその思想をもつて火つけ役をし



てやつた生徒たちにたいして無責任すぎると思うのです。

一例をあげると「やまびこ学校」の無着成恭氏むぢやくせいきやうを私はある種のすぐれた教師だと思いますが、しかし、あれほど明瞭にはげしい形でラジカルな思想で生徒たちに火をつけておきながら、その無着氏自身が、その当時から現在も、もし一個のチャンとした社会主義者でも共産主義者でもなかつたとしたら、ずいぶん無責任な妙な話だと思うのです。なぜなら、それは自分がその食べものを食つてみて、それがよい食べものであるという実際的な確信を持たない大人が、自分よりも弱い消化器官しか持つていない幼児に、その食べものを食べさせているようなことだからです。もちろん、どう見つもつて見ても、それらの教師たちの、そのような行きすぎのいつさいが、彼らの教育熱心や生徒にたいする愛情や善意から発したものであることは疑えないのですから、とがめるわけにはいかぬことです。しかし、この世の中では熱心や愛情や善意が、ときにひじょうに困つたことや怖ろしいことを生みだしてしまうこともあるのではないでしようか。

5

T君――

この返事も長くなりすぎました。あとはすこしハシヨつて簡単に書きます。

君の手紙の3に「赤堤あかづつみのカーテン」のこと、パチンコのことを質問していられます。「赤堤のカーテン」というのは、どんな雑誌でどんな記者が言つたことか私は知りませんが、それはとんでもないあやまりで、私がある人びとに語つたことをそれらの記者があやまり伝え聞いて、そ

れをおもしろ半分に書いたのだらうと思います。ただ火のないところに煙りは立たぬのコトワザのとおり、そのようにあやまり伝えられるたねは、やつぱり私にあるようです。

それは何かといえますと、まず第一に私自身がみずから劇作家であるくせに、近來新劇をほとんど見にいかないのです。それには、いろいろ理屈めいた理由がありますが、まずそんなことよりも一人の現代人・観客としての私に近ごろの新劇がおもしろくないからです。ピッタリしないからです。それだけの時間と金があれば、何かほかのことにそれを使うほうが私の生命はいきいきとし、充実するからです。

じつは現在の新劇の観客の中には、新劇に十分の満足は感じないままに、ただ一つの習慣、または「新劇ぐらい見ておなければ知識人として時代におくれるから」という考えから、または「新劇は高級な演劇だから」といつたふうの固定観念から、おびやかされ、または「自分も新劇みたいなことをしたいから、そのための勉強に」という気持から、その他一種の知的虚栄心のようなものから新劇を見にいつている観客がひじょうに多いのです。

これは、私が一二度、かなり科学的な方法で新劇の観客調査をしたことがあつて、それを基礎として言っているのです、私の独断的な感じだけではないのです。しかもそれらの観客の大半がふうよりも金持の人か、または経済的に自分以外のだれかに寄生して生活している人びとです。

私はかねて自分の生きかたのすべてを、自分の正直な意志や、欲望から出発していつている人間です。なぜなら私は幸福でなければならぬし、なりたいからです。

自分が本心からそうしたいと思うことで、他人の迷惑にならないことを私が知っていれば、たいがい私はそれをします。それをしてる私を見て他人が笑おうが軽蔑しようが、やつてのけま

す。同時に、他の人びとがどんなにたくさん、それをすることを良いことだとして行<sup>おこな</sup>っていることでも、私がそれをしたくないと思つたばあいはしません。少なくとも、しないほうがよいと思つています。

つまり私は、「多数」というサイミン術にひじようにかかりにくい人間であるし、かかりたくないと思つている人間なのです。それは私が、なるべくこれ以上不幸になりたくないからです。またなるべく、これ以上自分を墮落させたくないからです。

たとえば、私は他の人びとがどんなに多く、これこれの食物は上等で滋養分があると云つても、それを自分で一二度食つてみてうまくなかつたら、私はそれを食わないようにします。私にとつてある食物が滋養分に富んでいるのは、それを、私が健全な食欲でうまいと思つて食つたばあいのみなのです。他の人たちが貼<sup>は</sup>つてくれた「上等」や「滋養豊富」のレッテルにだまされて、うまくもない食物をつづけて食つていっていると、私の食欲は阻害され、そして私の本能（私という人間のひじように大事な部分）は救いがたく墮落して、ついに私は不幸になつてしまいますから。

そういうわけで、かなりまえから私は「新劇」という食物を、あまり食べないし、食べたくなのです。そして、自分が食べたくない食物を人にすすめるわけにはいきません。私が私の知人たち、ことに若い人たちに新劇を見にいふことをすすめない理由の第一はこれです。

第二の理由としては、今の新劇の大部分がそれ自体として、客観的に悪い食物になつてゐるためです。演劇として衰弱したり墮落したりした面が多いからです。

なぜそのようになつたかについては、外在的な理由——つまり今の日本の社会や文化の状態が悪いためと、内在的な理由——つまり新劇人の多くが演劇についての情熱を衰弱させてしまつた

り実践をあやまつたりしているためです。だから当の新劇人たちだけに責任があるわけではない。だれがやつても、だいたい似たようなことになるとも考えられます。

これらのことについて、もつとくわしく具体的に書けば、君にもつとよくわかつてもらえると思うが、いまその時間がないし、演劇研究者ではない君にたいしてその必要はないでしょうから、これ以上は書きません。

そして、いまの大部分の新劇のまちがいが、具体的にどういう現象になつて現われているかといえ、第一に新劇の興行形態の非民衆性です。第二に各種新劇団の運営一切を支配しているスタア・システムです。

興行形態の非民衆性とは、新劇の興行がまず地域的に中央にばかり偏在して行われ、つぎに現在の一般国民の中位以下の経済生活をしている人たち、つまり比較的貧しい勤労大衆には気やすく見にいけないような高い入場料でもつて公演されていることです。

新劇とは芸術的で良心的な新しい演劇のことですが、良心的であるということは、かならずしも芸術としての内容の内がわだけの性質ではなくて、その芸術がだれに手わたされるかという問題にもかかわりのあることです。すぐれた演劇は、どう見つもつても、その国民全体のものでなければなりません。したがつて国民全体がなるべく均等に自由にこれを受けいれうるような条件でもつて提供されなければなりません。そして国民全体というばあいには、その八十パーセントから九十パーセントを占めている比較的貧しい勤労者たちを無視するわけにはいかないのは当然です。

いまの新劇の多くが、ほとんど東京で、しかもその東京も中央部ばかりの劇場で、ふつうの勤

労者にとつては重荷になるような料金で公演されている。言うまでもなく、これらには、さしあたりどうにもできない理由のあることで、たいがいのばあいには、新劇人たちがそれを望んでしていることではなくて、しかたがないからそうしているという事情はあります。

また、料金だけのことを言えば、現在映画の入場料が百円から百五十円しているのだから、新劇の料金が、かりに二百円であつても三百円であつても、その比較のうえからは、映画よりも安すぎこそすれ、高すぎるとはいえないとも考えられます。その他いろいろの面でいまの新劇人諸君はたいがい善意の人たちで、演劇を愛しているために新劇をやつていて多く、金もうけだけを主目的として芝居をしている人は、ほとんどおりません。にもかかわらず、もしいまの新劇人たちの多くが新劇というものの本質をよくつかんでいれば、もうすこし多数の国民大衆に自分たちの演劇を見てもらおうべく、いろいろの努力を示しているはずで

とところが、そういう現象はひじょうに僅かしかありません。そして大半の新劇団や新劇人たちは、最初はやむをえないこととして、そして現在は、ほとんど何も考えないで、ダラダラと芝居をしたり映画に出たり放送に出たりしているありさまです。

新劇のこのような状態から逆さかにこんどは新劇の演劇としての質が強い作用を受けています。演劇というものは、最初は演劇人がつくりだして観客に与えるものですが、つぎには、それを見た観客からの逆作用を受けてその性質を変えていく生きものだからです。

お金持の坊ちやん嬢ちやんなどを主なる観客として公演されている新劇は、その内容が特権階級のサロンふうなものになつていきます。またスタア・システムというものは、根本的にはファッシズムまたは全体主義です。ところが演劇の眞の喜びは、全体も部分々々も徹底的に民主主義

的なものからのみ生まれる。それは演劇芸術の成りたちの本質なのです。

以上のような意味で、いまの新劇の大半がひじょうにまちがつているし、また、そのまちがいを矯正しようとする意欲もいまの新劇界にはあまり認められません。

このような意見は、これまで幾度も幾度も私は公表してきました。しかし、ほとんど効果はなかつたばかりでなく、このような意見を持つているために私は人からきらわれて、自身劇作専門家であるにもかかわらず、いまの新劇界からある意味で落伍してきました。落伍をさびしいことと思いますが、しかし私は悲しんではいません。なぜなら私は私の考えかたが正しいことを知っていますから。

しかし私は絶対主義者ではない。そのことについて私は自分の正しさを知っていますが、自分の意見を他の人に強制したいとは思わないし、強制したことはありません。ただ私は世間の人や知人たちや、ことに若い世代の諸君、なかんずくつぎの時代の演劇を担おうとして苦しい勉強をつづけている若い諸君にたいして、心にもない嘘を言うわけにはいきません。だから私はそのような人たちにたいがいこのように忠告します。

「もし君が本心から新劇を見たいと思つたら、どんな障害があつても、できるだけ見るようにしなさい。その自分の欲望にできるだけ忠実でありたまえ。そして見に行くときには、なるべく人からもらつた金や借りた金や無料のキップで行かないで、君自身が汗を流して働いてえたお金で、キップを買つて見にいきたまえ。そうすれば、その新劇が君にとつておもしろかつたり、見て張りあいがあつたりしたばあいには、君は深い満足を感じて、またつぎにも見にいきたくなるだろう。そしたらまた見にくうにしたらよい。」

もしまた、その新劇が君にとつておもしろくなく退屈で意義が感じられなかつたばあいには、君はせつかくの金と貴重な時間をムダに失つたことで腹がたつにちがいない。すると、もう二度とその新劇を見にいかないだろうし、行かないほうがよい。」

私のところにやつてくる若い演劇研究者たちは、まじめなよい人たちが多い。そして金持の坊ちやん嬢ちやんといえる人は、ほとんどいません。自分で働いて生活している人もかなりあります。そういう人たちの時間と金を私はムダについやさせたくない。だから、どちらかというところ、いまの新劇をわざわざ見に行く必要はないなあ。」とは言いますが、積極的に「見に行くな。」と言つた例はありません。むしろその逆です。彼らはひとりで、いろいろの新劇を見にいつて、そのつまらなさに腹をたてたり退屈した人たちなのです。だから私の考えかたに賛成もしますし、その後はあまり新劇を見にいなくなつています。

実情は以上のとおりです。これがいろいろ、あやまり伝えられて、君の読んだ演劇雑誌の記事になつたのでしよう。自分の周囲に、どんな種類であろうとカーテンを引いたりすることと、私という人間の生きかたほど縁どおいことはないのです。

つぎにパチンコのことですが、君の手紙のあのくだりを読んで私は笑いました。そのうちに私の笑いは歪んできて、しまいに泣きべそのようになつた。それは、君のようなすぐれた青年教師が、それほどまでに固定したりゴリズムにおちいらなければならぬような、いまの時代の歪みをシミジミと感じたからです。

それはたとえば、菊の花がきれいに咲いているのを眺めた人が「ああきれいだなあ」と思うひまもないうちに、その花びらは食べられるであろうかとか、食べることは正しいであろうかとか、

食べるときにはどんな料理にしたらよかろうかと考えるならば、その人は何かの意味で病んでい  
るのだし、そして、その人をそう病ませた時代そのものが病んでいると言えるようなものです。

どういう意味からも、パチンコ遊びを私がすいしようしているとは思わないでください。それ  
は、あまりほめた遊びではない。不潔だし孤独だし下品だし、それにバクチです。やらないでい  
られる人はやらない方がよい。しかしそれを、とくに下劣な、よこしまな、墮落した遊びだと思  
うのは、やはり思いすぎです。

たとえば、人間はタバコを吸う。私も好きで吸いますが、ある種類の封建的な倫理で育てられ  
た人や、厳格な宗教的規範をとりもつて生きている人たちの中には、まれにタバコをひじように  
邪悪な嗜好物と考えて、それを吸うことを一大罪悪のように恐れる人がある。そうです、タバコ  
が人間のために、たいして役にたつとは考えられない。しかしそれほど有害でも悪いことでもあ  
りません。

じつは私がパチンコをやりはじめたのは、最初、あのような遊びが流行するのはけしからんと  
思い、その悪口を書こうと思つた。悪口を書くためには、いちど自分がやつてみなければなるま  
いと思つて、やつてみた。すると、じつは私が思っていたよりも、むじやきな遊びで、ある料金  
である時間のあいだやれば、いい加減おもしろいし、ことに私どものように原稿を書いたりもの  
を考えてばかりいる人間にとつては、頭のシコリをほぐすのに多少効果があることがわかりまし  
た。だからその後かなりチョイチョイやるようになりました。

現在はもうあきました。それでも、ときどき近くの店でやることがあります。これは、その  
他のいろいろな遊びごとや好きな食い物や好きな見ものにたいするのと同じように、私において



きわめて自然なことなのです。だから君から、なぜパチンコをやるかとか、そのときの気持はどんなだとか、またはその他の私の思想とパチンコの関係はどうかとか、さも異様なことのように質問されると、私にはひじょうに意外で、そういう質問自体が異様にきこえます。

また「三好十郎がパチンコをする。」と言つて、君をいじめた君の友人たちは何というおかしな人たちだろう、またそういう理由で友人たちからいじめられて、ヘンテコな弁解をしている君は何というおかしな人だろう、もしかすると君は、三好という人間はもつとも封建的な修身教科書から抜けだしてきた人間で、本を読んだり原稿を書いたり人のために奉仕したりする以外のことは、どんなこともしない人間だと思つていゝるのではあるまいか、と思つたりします。それは、ひじょうな誤解です。私はふつうの人間だし、ふつうの人間たらんとしてゐる者です。たいがいの人間のすることはなんでもやります。酒を飲んで酔っぱらつて、わいざつなことをしやべつたりしたりすることもあつし、糞もたれます。ストリップ・ショウなども見にいけます。君はどうですか？

しかし、なるほど、もしかすると君の気持にも多少理由があるかも知からない。というのは、しばらくまえに、ある放送局から私のところに「朝の訪問」という話を吹きこみにやつてきたが、アナウンサーがいろいろ私に質問した中に「パチンコをおやりだそうですね？」と言うから、

「やりますよ。」と答えたら「どこでおやりですか？」と言うので「すぐ近くの。パチンコ屋でやります。」と答えたちアナウンサーが「ふつうは、有名な人で上品な方は。パチンコをやつても近所の人の目をはばかつて、家の近くの店ではやらないようですが、あなたはどいうのか？」と言いました。

「そう、私はあまり上品ではないとみえて、パチンコをしているのを近所の人に見られてもそれほど恥かしいとは思わないから。」と私は答えた。アウンサアがそういうくらいですから、なるほど世間一般からいえばパチンコをするのを恥じるというのがふつうかもしれない。私にしてもそれを自慢にはしていません。どちらかというところ、いいオヤジが子どもらしい遊びをしていることに、むじやきな意味ですこしきまりが悪い。しかし人間として真に恥じるという気持は私にまったくくないのです。

もちろん、まえにも言つたように、これ以上さかんになつてよい遊びではない。もうすこし健康な、もうすこし人間に役にたつ遊びが新しく工夫されてもよいと思う。しかし私は貧乏人根性が強いいためか、たとえばブルジョアたちが、恐ろしく広い沃野をつぶして自分たちだけで楽しんでいるゴルフなどよりも、一般庶民との関係においては、まだ、パチンコの方がズツと自然で健全だと思ふのです。

このようなことについて、このような書きかたをしていたのでは、君に私の考えかたをわかつてもらえるのが、なかなかむずかしいと思う。たぶん、君と私とが会つて三十分か一時間いっしょにお茶をのんだり真剣に議論をしたり、外を歩いたり、その途中でいっしょにパチンコをしてみたりすれば、私の生きかたの全体がいつぺんにわかつてもらえるだろうと思う。

私の考えでは、君にとつていちばん必要なことは理論や学問ではなくて、一人の人間が人間として全的に生きる——つまり、楽しみ苦しみ努力し遊ぶなど——ということの実行的なエイ知ではないかと思ひます。もちろん、そういうエイ知を私が豊富にそなえているとは思えない。しかし、君に会つたうえでならば、私がわずかばかり手に入れている、人間らしい自然な姿を、君に

示してあげることができるとしよう。

それを思うと、遠くはなれていて、手紙の交換だけでこんなことを語りあわなければならぬことにイライラします。しかしさしあたり、しかたがない。どうか私の返事を落ちついて読んでくださって、できるだけありのままに私という人間とその考えかたを理解してほしい。

さてつぎに、君は共産主義と私の関係を質問している。これはたいへんだ。なぜなら、それはひじょうに長い時間とボウダイな紙数を必要とします。

しかし、それにしても、君がぜひそれを知りたいと思っていることは私によくわかるので、この返事を書きはじめるときには、私は書く気でいました。そして、ここまで書いてきたいま、さて、これをどう書けばよいかと考えるみると、ここでそれを書くことは、ほとんど不可能だということに気がついた。なぜならば、マルクシズムに私が入りこんでいつてから、それから抜けだした期間は、私の二十四五歳のころから三十一二歳までの七八年にわたる事件です。

しかも、マルクシズムというのは一つの体系をなした社会科学で、一面からいうとそれは一つの学問です。だから、私がいかなる理由からそれに入つていき、いかなる理由でそれから抜けだしたかを、ホントに説明するためには、科学としてのマルクシズムの全体と部分々々の学説を、マルクシズムの原典から引つぱりだしてきて、そのいちいちについて、君に理解させながら、しなければ意味をなしません。

それからまた、マルクシズムは他の一面からいうと、実践的な主義だから、私がマルクシスト時代に私がいかなる境遇のもとで、いかにマルクシズムを実践したか、またそのときに私を取りまいていたマルクシズム陣営およびそれを取りまいていた日本および世界の情勢がどうであつた

かを説明しなければ、具体的にはわかつてもらえないと思う。これらのことが、このような手紙で十枚二十枚、よしんば百枚をついやしても、とうてい満足にはやれまいと思います。

つぎに、私は本質的に一個の作家であつて、自分が真剣に考えた。実践したりしたことは、直接間接に作品の中に書いている。のみならず、私は評論をも書いてきているので、その中にもこの問題にふれたものは一つや二つではない。それらの作品や評論を読んでくだされば、君の知りたいと思われることのだいたいは知りうると思います。

もちろん、もつと直接的な形で、私と共産主義との関係、そして現在共産主義について私がどのような考えを持つているかについて書く必要があるかもしれないし、書きたくないこともないので、割に近い将来に書くだろうとは思いますが、さしあたりは、これだけでかんべんしてください。

君が健康で元気よくその山のなかで生き、さらに、よい教師になつてくださることを心から期待します。

底本.. 「日本及び日本人——抵抗のよりどころは何か」 光文社

1954 (昭和29) 年4月25日初版発行

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23) 年5月25日